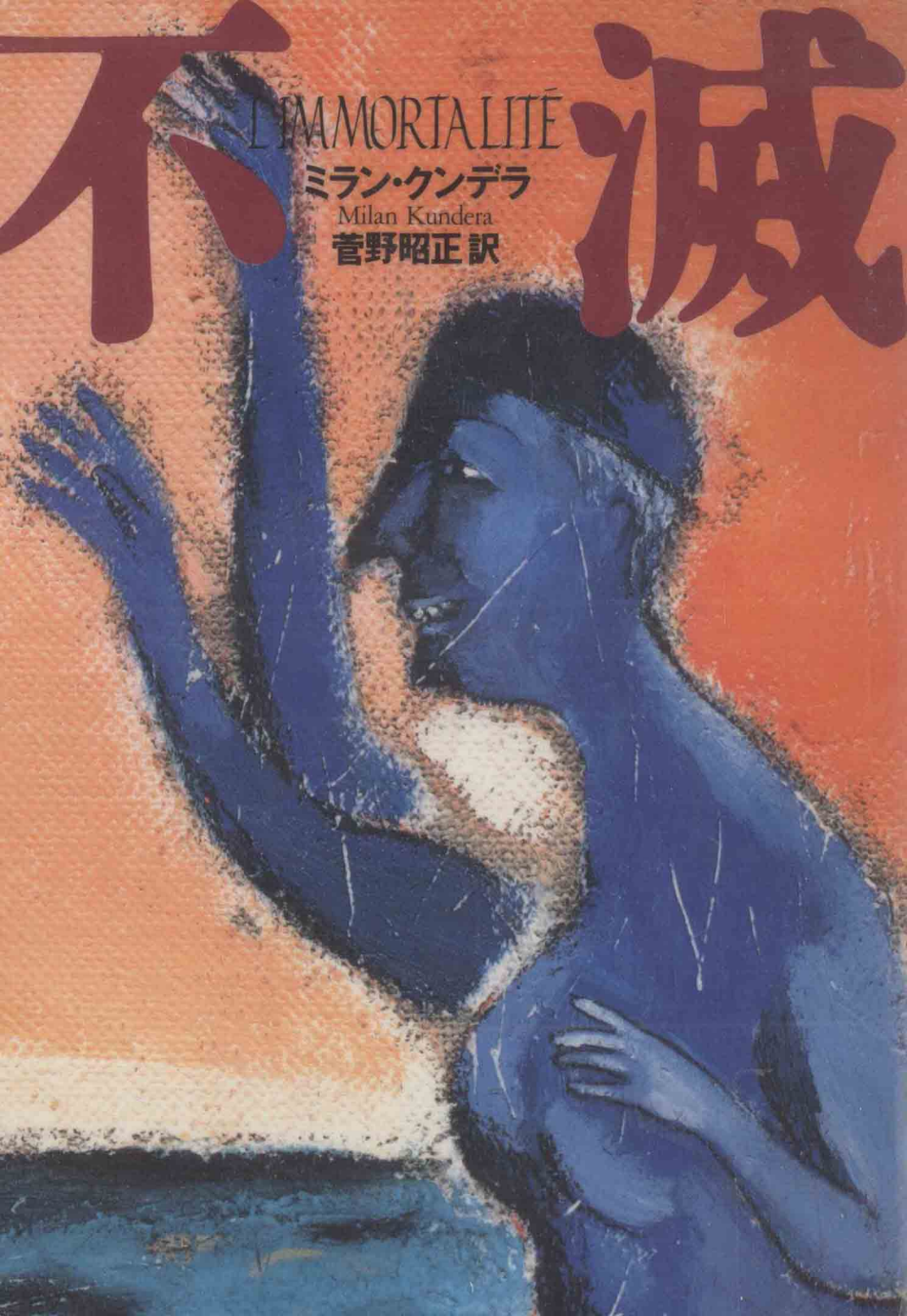
不滅

L'IMMORTALITÉ

ミラン・クンデラ

Milan Kundera

菅野昭正 訳



不滅

L'IMMORTALITÉ

Milan Kundera

吉野昭正訳

ミラン・クンデラ学院
藏書

集英社

L'IMMORTALITÉ
Original title:
NESMRTELNOST
by
Milan Kundera
Copyright © 1990 by Milan Kundera
Japanese translation rights arranged with
Milan Kundera, Paris
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

不滅(ふめつ)

一九九二年二月二五日　第一刷発行
一九九二年五月二五日　第四刷発行

著　者　ミラン・クンデラ
訳　者　菅野昭正(かんのあきまさ)
編　集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）三二三九―三八一一
発行者　若菜　正
発行所　株式会社集英社
一〇一―五〇　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　編集部（〇三）三二三〇―六〇九四
販売部（〇三）三二三〇―六三九三
制作課（〇三）三二三〇―六〇八〇
印刷所　図書印刷株式会社

©1992 Shueisha
本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

© Akimasa Kanno ISBN4-08-773143-X C0097

不滅

目次

第一部　顔　5

第二部　不滅　65

第三部　闘い　133

姉妹　黒眼鏡　身体　足算と引算　年上の女と年下の男　第十一戒
イマゴロジー　彼の墓掘人どもの才気ある同盟者　完全ロバ　雌猫
人権侵害にたいする抗議の仕草　絶対に現代的であること
栄光の犠牲者であること　闘い　アヴェナリウス教授　身体
不滅の欲望の仕草　曖昧さ　女占い師　自殺　黒眼鏡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四部　ホモ・センチメンタリス　279
第五部　偶然　331
第六部　文字盤　411
第七部　祝宴　497
訳者あとがき　菅野昭正　523

装画　山本容子
装幀　坂川栄治

第一部

顔

1

そのご婦人は六十歳か、六十五歳くらいだったろう。ひろびろしたガラス窓を通して、パリがすっかり見えるモダンな建物の最上階にあるスポーツ・クラブのプールを前にして、長椅子に寝そべりながら、私は彼女を見つめていた。アヴェナリウス教授を待っていたのだが、彼とはときどきここで会ってあれこれ議論するのである。しかしアヴェナリウス教授がまだ来なかったので、私はその婦人を見つめていた。プールにただひとりだけ、腰のあたりまで水につかっている彼女は、自分の頭の上のほうに立って、泳法のレッスンをしてくれる、トレーニングウェアの若い水泳の先生をじっと見あげていた。先生の指示を聞きながら、彼女はプールの縁にしっかりつかまって深呼吸した。真面目に、熱心にやったので、まるで水の底から古い蒸気機関車のひびきが立ちのぼってくるかのようだった（今日では忘れられたあの牧歌的なひびきを聞いたことのないひとびとに分ってもらうには、私としてはプールサイドで息を吸ったり吐いたりする年輩の女性の息づかいにたとえるしかないのだが）。魅惑されて、私は彼女を見つめていた。その痛ましいおかしさに心をとらえられていたのだが（その

おかしさを、水泳の先生も感じていた、というのは彼の口角はしじゅう震えつづけているように私には思えたから)、誰かに話しかけられて私の注意はそらされてしまった。そのあとすぐ、また彼女を観察したいと思ったとき、レッスンは終っていた。彼女は水着のままプール沿いに立ちさってゆくところで、水泳の先生の位置を四メートルから五メートルほど通りこすと、先生のほうをふりかえり、微笑し、手で合図をした。私は胸がしめつけられた。その微笑、その仕草ははたちの女性のものだった！　彼女の手は魅惑的な軽やかさでひるがえったのだ。戯れに、色とりどりに塗りわけた風船を恋人めがけて投げたかのようだった。その微笑と仕草は魅力にみちていたが、それにたいして顔と身体にはもうそんな魅力はなかった。それは身体の非＝魅力のなかに埋もれていた魅力だった。もっとも、自分がもう美しくないと知っているにちがいなかったとしても、彼女はその瞬間にはそれを忘れていた。われわれは誰しもすべて、われわれ自身のなかのある部分によって、時間を越えて生きている。たぶんわれわれはある例外的な瞬間にしか自分の年齢を意識してはいないし、たいていの時間は無年齢者でいるのだ。いずれにしろ、水泳の先生のほうをふりかえり、微笑し、手で仕草をした瞬間（先生はもうこらえきれなくなり、吹きだしてしまった)、自分の年齢のことなど彼女はなにも知らなかった。その仕草のおかげで、ほんの一瞬のあいだ、時間に左右されたりするものではない彼女の魅力の本質がはっきり現われて、私を眩惑した。私は異様なほど感動した。そしてアニェスという単語が私の心にうかんだ。アニェス。かつて私はその名前の女性と知りあったことはない。

2

私はベッドで、半睡の心地よさにうとうと沈みこんでいる。六時に、最初のかすかな目覚めが来るとすぐ、私は枕もとに置いた小さなトランジスター・ラジオに手を伸ばして、スウィッチを押す。単語がほとんど聞きわけられぬまま、朝のニュースを聞き、そしてまたうつらうつら眠るので、聞いている言葉が夢に変ってしまう。それは眠りのもっともすばらしい佳境、一日のもっとも甘美な瞬間である。ラジオのおかげで、わが果てしなき目覚めと就眠を、覚醒と眠りとのあいだのこの絶妙の均衡を、生まれてきた悔恨をただそれのみで取りのぞいてくれるこの動きを、私は味わうのだ。私は夢をみているのか、それとも本当はオペラで、天気予報を歌う騎士の扮装をした二人の役者を前にしているのか？　なんで彼らは愛を歌わないんだ？　やがて私もこれはキャスターなのだと分るが、彼らはもう歌うのはやめて、たがいに相手の話を中断してはふざけあう。「日中は暑くなり、猛暑になるでしょう、雷雨があるでしょう」と一方が言うと、もう一方が「まさかあ！」と媚びるようにその言葉をさえぎる。一方が同じ調子で答える、「そうなんだよ、ベルナール。残念だが、どうにもならない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ね。すこし元気を出すんだな！」ベルナールは声をあげて笑い、こんなふうに言明する、「これぞわれらの罪にたいする罰だな」すると一方が、「なぜだい、ベルナール、なぜぼくがきみの罪のために苦しまねばならないんだね？」するとベルナールはいっそう声をあげて笑いだし、話題になっているのがどんな罪であるか聴取者に上手につたえ、そして私には彼の言わんとするところが分る。われわれすべてが、心底から望んでいることはただひとつしかない。全世界がわれわれを大いなる罪人とみなさんことを！　われわれの悪徳は驟雨に、雷雨に、暴風雨になぞらえられんことを！　今日、頭の上に傘をひろげながら、フランス人それぞれがベルナールのいかがわしい笑いを思いだし、そして彼を羨望するがいい。私はもっと思いがけないイメージとお付きあいしつつまた眠りたいと思いながら、スウィッチを廻す。隣の局では、女性の声が日中は暑く、猛暑で、雷雨になりそうだと告げているが、フランスにはたくさんラジオ局があり、しかもすべてが同じ瞬間に、同じことを話しているので私は嬉しくなる。画一性と自由の幸福な結婚、これに優るどんなことを人類が望めるだろうか？で、私はベルナールがおのが罪をひけらかしていた局にもどる。しかし彼にかわって別の男の声がルノーの最新モデルへの讃歌を歌いはじめ、私はまたスウィッチを廻し、女性コーラスが特売の毛皮を褒めそやし、私がベルナールのところへまたもどると、ちょうどルノーへの讃歌の最後の何小節かが聞えてくるところで、それからつぎにベルナール当人がまた話しはじめる。終ったばかりのメロディーを真似しながら、彼は歌うような声でヘミングウェイの伝記が出たところだと知らせてくれる、百二十七番目だが、今度は本当にたいへん重要なものだ、というのは生涯のあいだ、ヘミングウェイはただの一語も本当のことを言わなかったことを証明しているから。[1] 彼は戦傷の数を誇張し、大変なプ

レイボーイであるふりをしていた、一九四四年八月に、ついで一九五九年七月以後、まったく不能だったことが立証されたというのに。「まさか」、もう一方の声が笑いながら言うと、ベルナールは媚びるように「いや、そうなんだよ……」と答え、そしてまたまたオペラの場面のような騒ぎに舞いもどり、不能者ヘミングウェイまでわれわれと一緒になり、ついでひどく重々しい声が、ここ何週間かのあいだフランス中を興奮させているある訴訟に言及する。なんのこともない手術中に、麻酔の操作を誤って女性患者の死をひきおこしたのだという。その結果、《消費者》を擁護することを任務とする団体が、われわれすべてに呼びかけているとおり、今後はありとあらゆる外科手術をすべて撮影させて、フィルムを保管所に保存することを提案している。それこそ、《消費者擁護のため》の団体によれば、メスのために死んだフランス人にたいして、法廷によって正当な報復をくだしてもらえるよう保証する唯一の手段ということらしい。それから私はまた眠りこむ。

眼が覚めると、もうほとんど八時半だった。私はアニェスのことを想像した。私とご同様、彼女は大きなベッドに横になっている。ベッドの右半分は空っぽである。夫はどんな人物だろう？　どうやら、土曜日には朝早く出てゆくひと。だから彼女はひとりきりなのであり、そして心地よく、現と夢のあいだでためらっているのだ。

それから彼女は起きる。正面、横長の台の上に、テレヴィが突ったっている。彼女は下着を投げかけ、それが白い掛布になってスクリーンを覆ってしまう。はじめて私は裸の彼女を見るのだ、わが小説の女主人公アニェスを。ベッドのそばに彼女は立っているが、彼女はきれいで、私は彼女から眼が離せない。結局、まるで私の視線を感じたかのように、彼女は隣の部屋に逃げこんで、服を着る。

アニェスはどんな女性か？

イヴがアダムの肋骨から出てきたのと同じく、ヴィーナスが泡から生まれたのと同じく、彼女は六十代の婦人のある仕草からふと現われたのであり、私はプールサイドでその婦人が水泳の先生に手をふって挨拶するのを見たのだが、彼女の顔だちは私の記憶のなかでもうぼやけている。彼女の仕草がそのとき私のなかに途方もなく大きな、わけの分らないノスタルジアを呼びさまし、そしてそこから、アニェスという名を私がつけた作中人物が分娩されたのである。

しかし人間というものは、ましてや小説の作中人物というものは、他に類のない追随しえない存在と定義されるのではあるまいか？　では、ある人格Aに観察された仕草、その人格と一体をなし、その人格を特徴づけ、その独得の魅力をつくりだしていたあの仕草が、同時にある人格Bの本質であり、その人格についての私のすべての夢想の本質だということが、いったいどうしてありうるのか？　それは熟考を要することである。

われらの地球が八百億近くの人間が通過するのを見てきたにしても、彼らがそれぞれ各自固有の仕草のリストをもっていたことなどありそうにない。算術的に、それは考えられない。この世には、個人の数より仕草の数のほうが少ないことは明白である。そこでわれわれは不快な結論に導かれる。つまり、仕草のほうが個人そのものより個性的なのだ。それを諺のかたちで言うと、ひと多けれど、仕草少なし。

第一章で、水着のご婦人について、私は「ほんの一瞬のあいだ、時間に左右されたりするものではない彼女の魅力の本質がはっきり現われて、私を眩惑した」と言った。そう、それはあのとき私の考

えたことだが、しかし私はまちがえていた。その仕草は婦人の本質をいささかもあらわにしたわけではなく、むしろ婦人はある仕草の魅力を私に啓示してくれたのだと言うべきだろう。なぜならば、ある仕草はある個人の所有物だとみなすこともできなければ、その創造物とみなすこともできないし（なにしろそのひと特有の、完全に独創的な、そして自分だけのものである仕草を創造することなど誰にもできはしないのだから）、その道具とみなすこともできないのである。が、反対は真実である。つまり、仕草のほうこそわれわれを利用しているのだ。われわれは仕草の道具であり、操り人形であり、化身である。

アニェスは、服を着終えると、外出する支度をしていた。次の間で、彼女はちょっと立ちどまって耳をすました。隣の部屋でなにか物音がして、娘が起きだしたのが分った。娘と会うのを避けるかのように、足どりを早め、急いでアパルトマンを出ていった。エレヴェーターに乗ると、一階を示すボタンを押した。動きだすどころか、エレヴェーターは舞踏病にかかった人間のように、痙攣的に震えた。この機械の気分に彼女が驚かされたのは、これがはじめてではなかった。あるときは彼女が降りようと思っているのに昇ることもあったし、ドアを開けるのを拒んで、半時間も彼女を閉じこめたままにしたこともあった。エレヴェーターは会話を切りだしたがっているかのようであり、物言わぬ動物のような荒っぽい手段で、なにか緊急なことをつたえたがっているかのようだった。もう何度も繰りかえして、彼女は管理人に苦情を訴えていた。しかし管理人は、エレヴェーターは他の借家人にたいしては正確に機能していることに鑑みて、アニェスとエレヴェーターとの係争を単なる私的事件と見るだけで、なんら注意をはらおうとしなかった。アニェスはエレヴェーターから出て、徒歩で降り

なければならなかった。彼女がそこから離れたとたん、エレヴェーターは落着き、そちらはそちらで下へ降りていった。

土曜日はいちばん疲れる日だった。夫のポールは七時前には家を出てゆき、そしてある友人と昼食をすることになっているのだが、それにたいして彼女のほうはこの自由な日を利用して、会社での仕事より煩わしい、たくさんの義務をかたづけることにしていた。郵便局へ行くこと、半時間も行列を我慢すること、スーパーマーケットで買物すること、売り子と喧嘩すること、レジの前で時間を空費すること、配管職人に電話すること、一日中職人を待たずに済むように一時きっかりに来てくれと頼むこと。急用と急用のあいだに、週日には出かけてゆく余裕などまったくなかったサウナのための時間をなんとか見つけようと努め、そして午後の終りは掃除機をかけ家具を雑巾で拭くのに時間を使ったが、それというのも家政婦が金曜日に来るものの、だんだん仕事をおろそかにするようになったからだ。

しかし、その土曜日は他の土曜日とは違っていた。父の五度目の命日だった。ある場面が彼女の心にうかんだ。父は坐り、ずたずたにひきさいた写真の山の上に身をかがめ、そしてアニェスの妹が声を張りあげる。「なぜお母さんの写真を破くの？」アニェスは父を弁護し、姉妹はとつぜん憎しみにとらえられて、二人で言い争う。

彼女は家の前に駐車してあった車に乗った。

訳注（1）この第一部の最初の部分においては、小説のなかの時間は、一九八七年ごろと想定されているようだが、このころ刊行された重要な伝記として、たとえばケネス・リン『ヘミングウェイ』がある。

3

エレヴェーターが彼女をあるモダンな建物の最上階まで運んでいったが、そこには体育ホール、プール、渦流小プール、サウナがあって、パリを見晴らせるクラブが設けられていた。更衣室では、拡声器がロックミュージックをぶちまけていた。十年前、アニェスが入会したとき、会員は少数で雰囲気は静かだった。それから、年々、クラブは改良された。ガラス張り、照明、人工植物、拡声器、音楽がだんだん増え、常連もまただんだん多くなって、経営陣がかねがね体育ホールの壁全面に取りつけようと決めていた巨大な鏡に、彼ら常連の姿がいよいよ映った日、その数はさらに倍加した。

アニェスはロッカーを開け、服を脱ぎはじめた。二人の女がすぐ近くでおしゃべりしていた。アルトのゆっくりした穏やかな声で、一方の女が、本や、靴下や、パイプまでも、そしてマッチも、なんでも床にちらかしっぱなしにする夫のことをこぼしていた。もう一方は、ソプラノだが、二倍は早い話しかただった。センテンスの終りで、一オクターヴあがるフランスふうの調子のあげかたは、雌鶏の怒った鳴声を思いださせた。「まあ、そんな、あなたにはがっかりするわね！　嘆かわしいひとね

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com